

「 最後とは知らぬ最後が過ぎてゆく

その連続と思う子育て 」



詩人俵万智さんの短歌です。子どもが成長していく中で、初めて言葉を話した日、初めて歩いた日など、“初めて” はよく覚えているものです。

ところが、最後におむつを替えた日、最後に手をつないだ日など、“最後” は意識しないまま日常の中に溶け込んでしまうものですね。

だからこそ、子どもと接する時間を大切にしたいと感じます。

1 インターネットの魅力って？

今や子どもたちは情報を受けるだけでなく、発信する側でもあります。友だちへメッセージを送ったり、自分の撮影した写真を公開したり、音楽やゲームを楽しんだり。レストランでも、公園のベンチでも、スマホやタブレットに見入っている子どもの姿は、日常生活の光景となっています。

そんな中で、親の悩み事の上位にあがってくるのが、「子どもがスマホに夢中」「ゲームばかりしている」です。そもそも大人よりも子どもたちの方が、スマホに詳しいから口出しできない、うちの子は危ない使い方はしていないから大丈夫、という声もあります。

今回は、子どもたちの意見を聞いてみましょう。

アプリは無料なんだから、良いでしょう！？

スタンプだけで返事できるから、お手軽！

年齢に関係なく、ゲームのスキルを認めてもらえるのが嬉しい。

話すより、イラストや絵文字を使った方が、言いたいことが伝わると思う。

歴史に詳しくなったのは、ゲームのおかげ。

文字だけの情報より、写真で視覚的に見た方が分かりやすいです。



CM 動画見るだけで、ポイントがたまってお金がもらえるなんて、超ラッキー！

☆ 加害者にも、被害者にもならない使い方をしっかり話し合っておきましょう。

2 「できない」のは「やったことがない」から

「前転や逆立ちができない」、「ボールを投げられない」、「転んだときに手をつけない」という子どもたちが増えています。これは、子どもたちの運動能力が低下したということなのでしょうか？

そうではない気がします。私たちが幼い頃は、芝生の上やお布団の上で“でんぐり返り”をしていました。壁に向かって逆立ちをやってみたり、広場でどこまでボールを投げられるか友だちと競い合っていました。



今の子どもたちの様子を見ていると、「やったことがないだけ」

つまり、経験していないだけではないかと思うのです。環境の変化による経験不足が、子どもたちの「できない」につながっているのではないのでしょうか。



運動に限ったことではありません。食事の準備をしたことがないから「ご飯を炊けない」、包丁を持ったことがないから「リンゴの皮をむけない」、拭き掃除をしたことがないから「ぞうきを絞れない」など。

子どもたちが、いろんなことができるようになる、“学んでいく”は、まねをしていくことから始まります。家庭の中で親がやっていること、言っていることをお手本にしていくのです。無理のない範囲で、たくさんの経験をさせてあげましょう。

～ あとがき ～

先日初めて“歌舞伎”を観に行ってきました。“歌舞伎”とは言っても、“スーパー歌舞伎”です。本格的な歌舞伎と違って、セリフが現代語調なので、ドキドキ初心者私でも、すんなり内容を理解できました。始まってみると、舞台は回転するわ、今踊っていた人が早変わりして別人になっているわ、お衣装は豪華絢爛だわ、第三幕までのお芝居があっという間なのです。

それだけではありません。ロビーではお団子やお弁当が売られていて、お芝居が始まる前や幕間に、それらを座席で食べることができるのも、新鮮でびっくりでした。

そんな中、高校生の団体も観劇に来ていました。修学旅行かなと思い、話しかけてみると「芸術体験」の授業で来ているとのこと。高校一年生の体験学習の中に組み込まれていて、毎年何かしらの舞台を見学するのだそうです。

なんて素晴らしい！人生の早い時期に、観劇という形で日本の芸術文化に触れることができるとは！これからの君たちの進路や、考え方、生き方に何かしらの良い刺激となっていることを望むよ！！などと、密かに心の中で叫びつつ、私の歌舞伎初体験は終幕したのでした。

★ 今月のオススメ絵本は、「茶壺」作：中村壺太郎 です。

